結論

古今集の時代は「時雨(しぐれ)」は「雨」とともに使われ新古今集の時代は単独で使われる。

https://cuckoo.js.ila.titech.ac.jp/~yamagen/slides/rev-eal.js/ips/tech20190801yamagen-tokai-eonlab

Tokyo Tech

古今集と新古今集の間に見られる歌ことばの変化: 「雨」と「時雨」

山元 啓史　東京工業大学

シュビーゾー グリフィン　ワシントン大学

目的

- 「時雨 (しぐれ・じう)」
- 「時雨る (しぐる)」
- 日本の各地でみられる
- 「雨」と同じかどうか？

方法

- 材料: 八代集 (905 年頃–1205 年)
- 雨と時雨の共出現パターンで
- 共有パターンの有無を調べる

$$cw(t_1, t_2, d) = (1 + \log\ ctf(t_1, t_2, d))\sqrt{idf(t_1)}\ idf(t_2) \quad (1)$$

$$idf(t) = \log \frac{N}{df(t)} \quad (2)$$

結果

表 1　八代集における雨、4 種の出現頻度

No	出現数	用語	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
1.	164	時雨	16	17	15	16	6	9	34	51
2.	153	雨	23	33	25	15	8	4	8	37
3.	68	五月雨	3	5	5	10	11	4	16	14
4.	35	春雨	8	7	0	2	3	1	3	11

考察

時雨の雨／染かねてけり／山城の／ときはの杜の／まきの下葉は (新古今 577 能因)
時雨の雨／まなくしふれは／槙の葉も／あらそひかねて／色付けり (新古今 582 人麿)
龍田川／錦をりかく／神無月／しくれの雨を／たてぬきにして (古今 314 読人不知)
君かさす／三笠の山の／紅葉はの色／神な月／時雨の雨の／そめるなりけり (古今 1010 貫之)

神無月／時雨ふるらし／さほ山の／まさきのかつら／色まさりゆく (新古今 574 読人不知)
あきし野や／外山の里や／時雨覧／いこまのたけに／雲のかゝれる (新古今 585 西行)

桜花 (花)→ 桜　　→ 花といえば桜 (○)
時雨 (雨)→ 時雨 (独立)→ 雨といえば時雨 (？ ×)

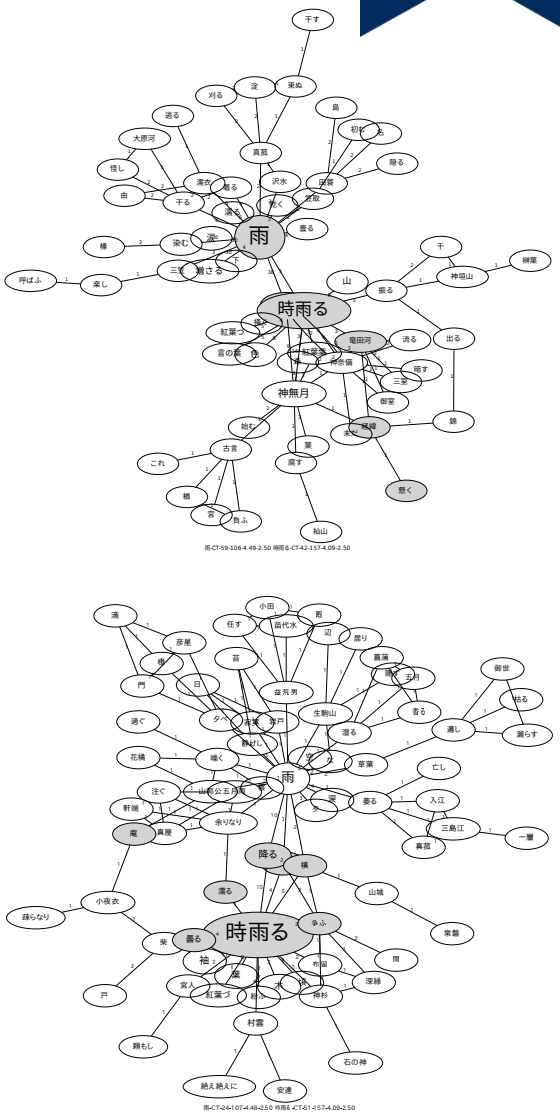

図 1　「雨」と「時雨る」の三代集の 100 年間（上）と 200 年後の新古今集の比較（下）